繪卒故事談

四

E
13
4

逍遙文庫
文庫6
25
4

繪本故事談卷之四目錄

屈原
鞿羈之思
東方朔
滑稽
武志士
蘇武
皇太妃
昭君
張南本
北殿司
莊周
胡蝶
馮媛
狗盜
藍喬
借車
張果
倒騎
郝仲初
酒狂
王冶
鑄劍
安世
藏金

助程
常在法師
末帝
元德秀
程之隆家
王紱
七步詩
陳榮
石行法師
道大祖
城皇女英
鍾馗
烏龜靈塔
子路
季札
子英

屈原 史記

我忠の時乃屈原名平楚の懐王の佐たり忽く
理を亂て懐王に惡つよく政乃ち明白なわされ新尚と云
ものおよく懐王に惡て懐王に惡つよく屈原の珠を奪ひて秦へ
られを故に秦の昭王に招されるをゆるして秦へ
行く病死せられわ懐王のこれわとを嗣く
頃襄王という末子蘭令尹れ宮となり此子蘭る初
懐王と訪く秦のまにに入〳〵め二度ふれを屈原のも
れと惜ま子蘭と思て上皮大夫と公を合せ
頃襄王へ惡て屈原を江南へ流罪

文庫6
25
4

せうふ巢父 許由

堯帝天下を許由に譲らんとし給ふ時許由聞て潁水に洗耳す巢父牽牛来て飲ませんとす許由の洗耳を見て何故と問ふ許由答て曰帝堯我に天下を譲らんとす故に洗耳すと巢父曰汝若し名利を貪る心なくんば何ぞ耳を洗ふ事あらんや汝が洗耳の水牛の口を汚すと牛を牽て上流に往て飲ませけり

ようふ 許由

堯帝天下を許由に譲らんとし給ふ時許由聞て潁水に洗耳す巢父牽牛来て飲ませんとす許由の洗耳を見て何故と問ふ許由答て曰帝堯我に天下を譲らんとす故に洗耳すと巢父曰汝若し名利を貪る心なくんば何ぞ耳を洗ふ事あらんや汝が洗耳の水牛の口を汚すと牛を牽て上流に往て飲ませけり

ようふ 許由

堯帝天下を許由に譲らんとし給ふ時許由聞て潁水に洗耳す巢父牽牛来て飲ませんとす許由の洗耳を見て何故と問ふ許由答て曰帝堯我に天下を譲らんとす故に洗耳すと巢父曰汝若し名利を貪る心なくんば何ぞ耳を洗ふ事あらんや汝が洗耳の水牛の口を汚すと牛を牽て上流に往て飲ませけり

三采なる今の色と錦よつて司よりれる御堂の夢ふかい龜死してさ骨を安く貴ま湯ぐがようんや又生て泥の中に尾を曳てあそぶがよりんやと問られた使者閉てる迚そ生て泥中ま無ふようあといふ莊子がいそく吾もさのおとし宮仕ようく壽を縮んよりわ詞とされく

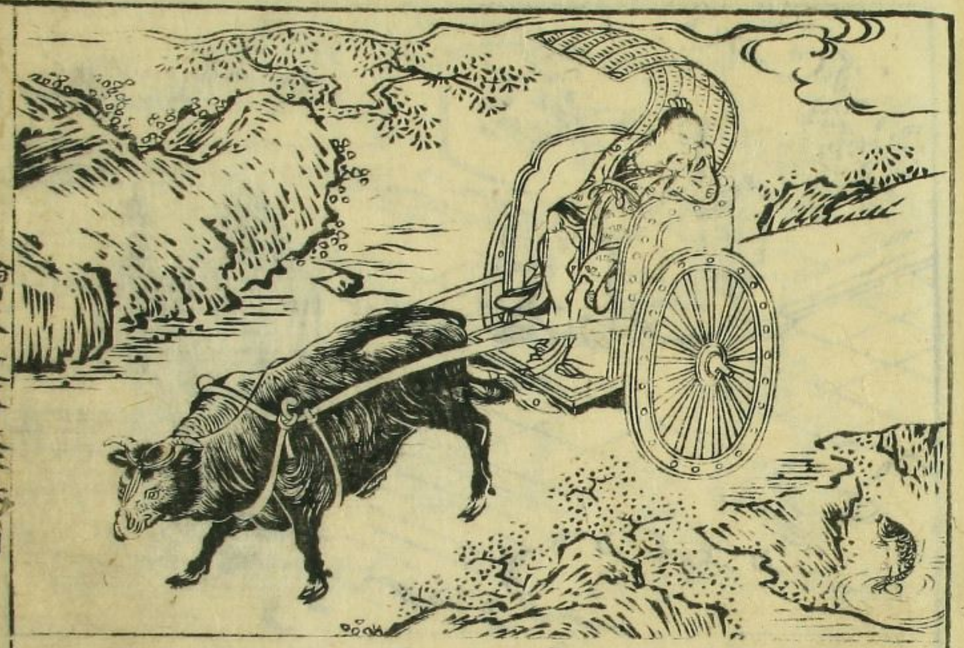
莊子 莊周

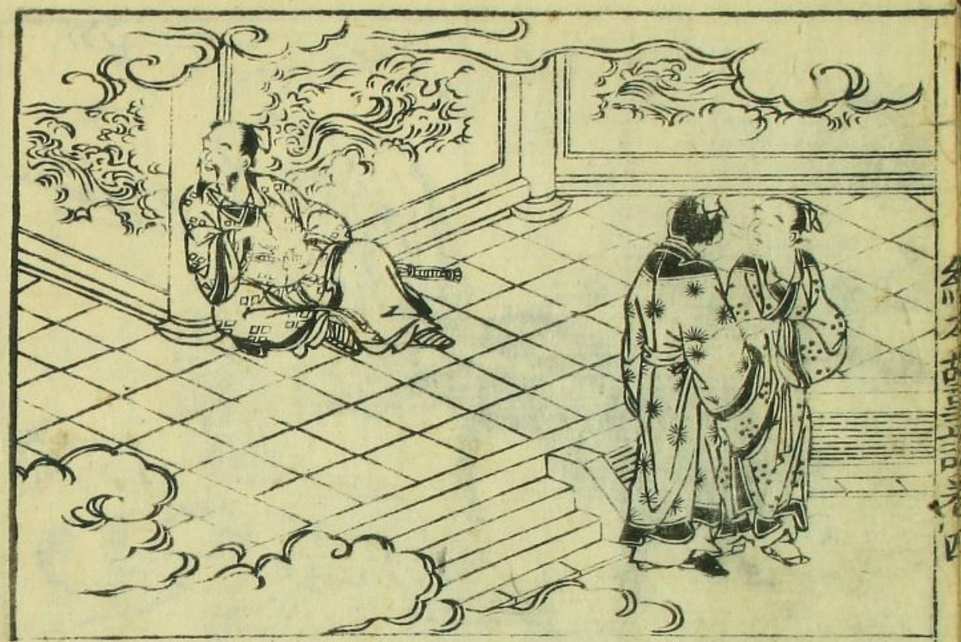
莊氏名ハ周字ハ子休楚王崇賜の人なり楚王莊子の德をきゝて幣物を遣し使者をそへまの掌ゟ不利んとそめされおや莊子ハ濮水の邊ゟ釣をされて居ふりしが仍とおく使者ゟ向ひて楚王ゟ神龜ありこゟ

命と思ひて又或時莊子魚の
あとに添ひもろこに就をとらせ
ふなを恵子といふ友まで海へ
をいんーて初やといひそれ
もわたして奥のふことを初やんに
掬中をいんーて初やんをいひくれ

轍鮒之思　同上

莊子車に乗て海の濱を通りけるに
莊子を呼けて氣早に逢て命ず
ぜよ追入て活ちれとふ莊子答て前
呉越の君よ遊ふ勧に西江の水をわけて汝を
迎ハーんとふ鮒魚大に
怒て左様のものやうな訳
のハ前をなぐることのもの
なり此の呉越へ逃ひて取
前よおれんと思て干魚と
成て魚店にのることを覚ハ
よねをいひくれ
是ハ世俗乃急なる難義をすくふに
して妹窓をおまもりくれへてそのこ
人のたよりともちんと思ふハ
ゆへをめとつてとへ
乃寓云々





馮煖 我国策

我国の馮煖ハ材者人ヨ
勝ルコレヲ負ヒテ自分
ノ子ヲ成ラシメテ
孟嘗君ヲ拝シテ奉仕ス
セシヨリ素ヨリ食客ノ
ナレモ朋ヲ得テヨリ
麤菜ナル食ヲ
ワケヘクヲ
ワノ時馮煖柱ヨリ
劍ヲ彈シテ歌ヲウタフ
いそく長鋏帰来乎食

ヨ魚ヲ列トいふ長鋏ノ劍ノ
ヲ彈ジテ歌ヒタルヲ
ゆんとうんぬん 嘗君ハレヲ
悉皆リ去レ
ともいふ
ヲ乃招部といひつけて
含セラル須ありて入長鋏
汲来乎出ヨ車カトうんぬん
朋ナコレヲ見テ笑ヲ
ヲ乃チ掌君
いのれ刃わこ者なろへーと云ひ
車ヲ乗ヘくらーわら

又ゑごゝく有て寢ぐるの八ツ長途歸來乎次て家とおこ
むのとなしといふ皆共無と
ふ若八貧欲よて忘ふ試ぬと思ふ賞君共
をも咎めず甚母の家よ衣食を運をて冬ーたとおく
告おそ後賞君薛と
紹とを收へーて馮煖よ
ふ馮煖出まに此債
も實求ん拘かさやと問
家よ寡もれわて實君のいとく何おくを
て債の者もと呼集め式
今まて乃債と悔ふ償ふうとて券契とおとくく

燒却ま氏も絶家夢ノの答ふ二ひと別て悦ひ
おり別て馮煖よ通りて
の仰よて之の宮中を寡ふ
てを念ことか只寡も乃八仁義のとなおよつく奉を
燒すてく仁義を大分よ買て悔おかとの八賞君
心よ入くねもを理よせもて地ともいそれなおふ其
返賞君齊王よお薛の地と賜ふて入部ちふそ共
薛の男女老若八街よ跪て吾ひ合事うきふ那し
賞君おのおりさ俄をとて馮煖よむひいいいふ八をお
おおー仁義を買ふ驗とて今おろ見つれとく
感じくり

東方朔　前漢書

東方朔字曼倩平原郡の人なり漢の武帝世に藝術の勝れ高位よりとらんことを求れい初元年十二月詔して賢良方正直言極諫の士を舉しむ朔上書して其略に曰臣朔年十五にして書を學ひ三年にして大義を畧通し十六にして詩を誦し二十二萬言を通十九にして孫呉の兵法戦陣の具鉦鼓の教を學ひ亦二十二萬言を誦又常に路の言と腹を誹朝年二十二にして九人三寸にして珠と綸りの如く歯は貝を編るが如し勇は孟賁のごとく捷は慶忌のごとく廉なり

藍喬　列仙傳

藍喬いつもに倍を吹き袖を振しまる仙人なり肆より出て酒を飲こと一ときひふ七八斗とかや多乃好きこと是のごとし紙数十枚をもて一枚つゝ捲しむるにひとつもやぶるゝもなしとなん

うるはく伝ことはて此生のおこなひ天子のほさくしと明方を尋てこゝ文章と早下をきこ多かし武帝是を奇として先公車門を徴招きしめ授郎官をうけしめて至てあつく恩寵及でいとく天下の人朔と云ふに朔と云ふ名か唯大伍公のごとおとといひて孫よひしかる武帝此語を聞て大伍公も幼をもおかく名をよ天文とるに従の星ひとつあしさかるとと四十年今又あをれるといふ武帝に属星ひとつあしさかるとと星の化しるかと尋てくしく朔を召て問給ふに勝をひしくとなん

武志士　同上

武志士ハ白き布を被りて空中を歩む仙人なり

張果　同上

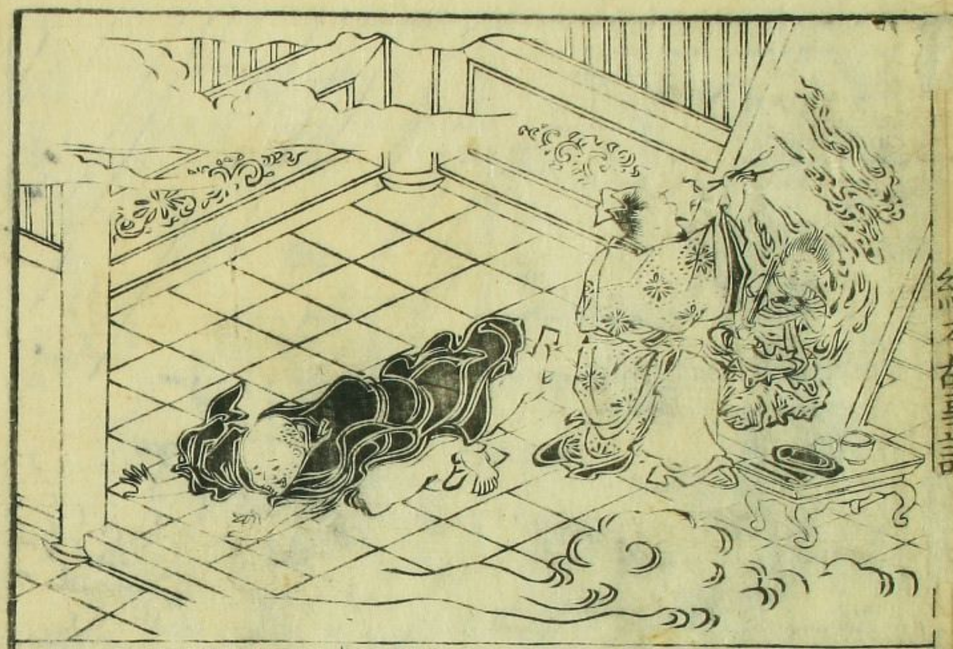
張果ハ白き驢に乗りて日ニ幾百里と数ふ里休息する時ハ折て紙乃ごとくして笈に入おく仙人や

皇太姥　同上

皇太姥ハ閩との地乃人なり母子二人武夷に行て薫粮を採て食ふ仙と称して能く風を呼雨を降也云々よて好事の人皇母と呼ぶ

謝仲初　同上

謝仲初ハ何の校と云ふ事を知ず仙人なり

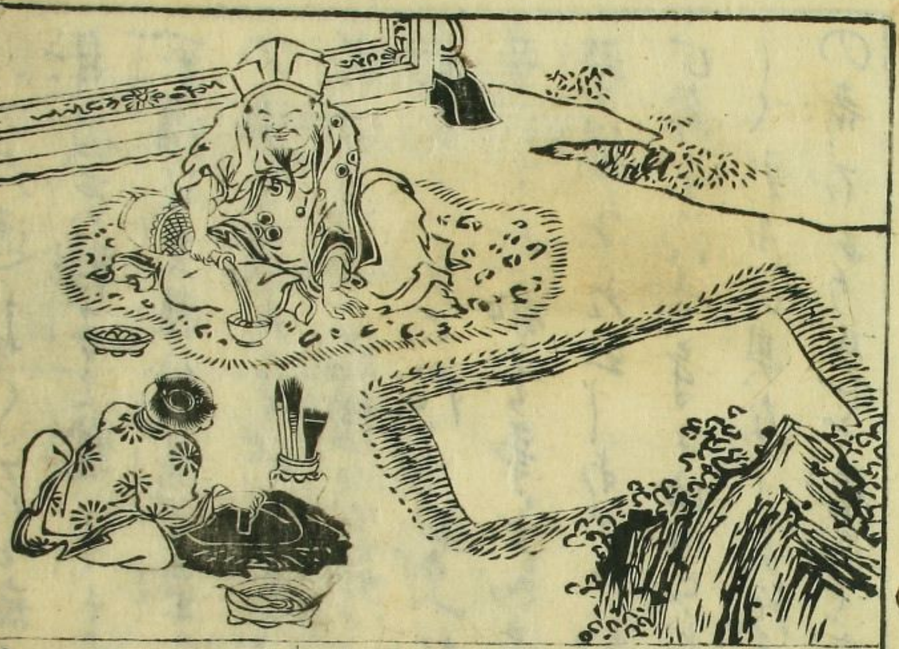


張南本 國会図蔵

張南本ハよく人物を写し
花火と畫よりなり成都の
金華山にて八明王を畫
ら乳母迫備わり堂に掛て
見るとうんりに火勢勇猛
つねく覚えて驚ク

王治 同上

王治ハ墨と澂て畫とをも
里性酒と嗜み毎ク景と
ふうハとくてハ必ず



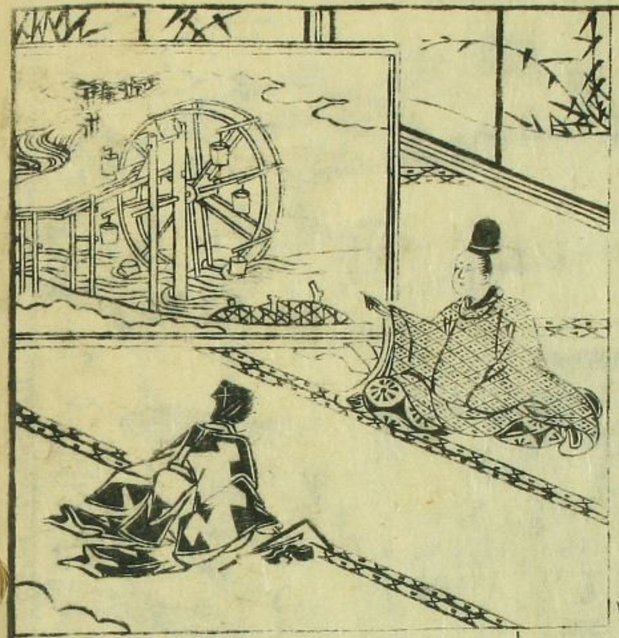
酒と飲酣てく后衣と解て
磚礴とんとつゐ出ん墨を以
紙上よおちし甚形の似ク
にまる也て或ハ山石くなし
或ハ林泉とおよび天然な
墨妙ありて化のよく及よ
所なからといへり

北殿司

明北殿司ハ東福寺の住
僧よくく性景畫よ能
て鉄筆の勤行よ怠れ

不のごとし
遠き島にて
本堂は納受
今ありて
珠窟と化
僧の畫なり
南
明
菴
の
庫下
菴なり

源の大通ありくこれを戒めり給とも教訓に随ふ
月破芳鞋子と號して畫中の印とす
耶澗破芳鞋八大通ま葉らくの義とて或は御深
の像と模んこと紙數ひて筑紫よりおもむりんこと給ふ
橋の色にて化僧忽然として来り何ごとやと問
厳司志ふかと況りて学ぶ化僧のいもくこと遠く求れ
事あれ永こと事を知ることなくてかさあれどくうもぬ厳司
染像をえ出しあくまで寺より
ば弘と況くまよ海りこれを写んとまるよ素より貧
して彩色の具なし寺の衆よ河あり此よ色
の奇石あり色を拾ひて磨て彩とすれ意よ欲

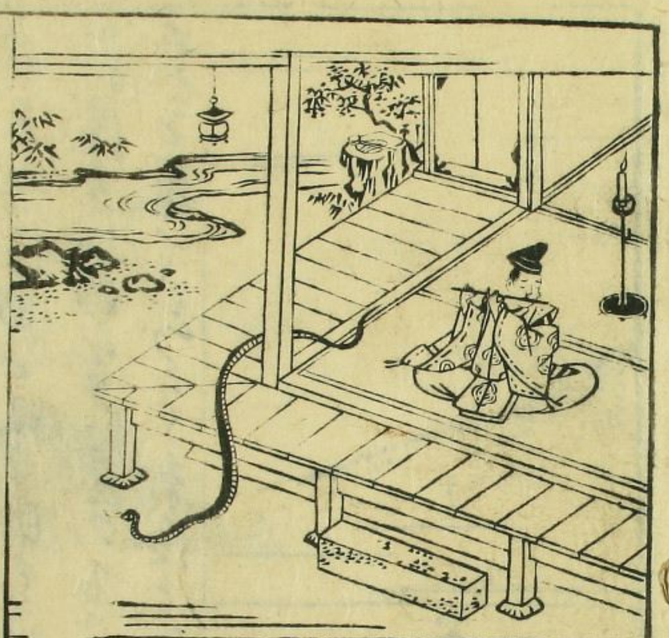


安世

誤署の安世の清和帝の清実にて廣才達藝の人なれ共天長い幸ま勅ともまち鉄ま の氏ま そ〳〵へ〳〵 ろ車をつく〳〵ゐ農畔の資とせ〳〵ま 知 おおて水車ま術奥と発

助種

清原の助種いう者ま 傳ま 語 る人あり嘗ま近府の禁 護ま し時 教文 よおよび いつくともおく 腹鼓 ま く ま ら に 宮 をおさんとん



助種さとん 驚 ま 奇の 堂 をこれ出し 公 ま づ つ て 還 城楽 を 奏 し ま れ こ 地 ま 以 て 忽 ま ち み げ さ ゐ ゐ ろ ま ま ま 地 逃 と そ なづけ ゐ ゐ

祖行法師

佐 友 善 清 ま 秀 ま 弟 ま

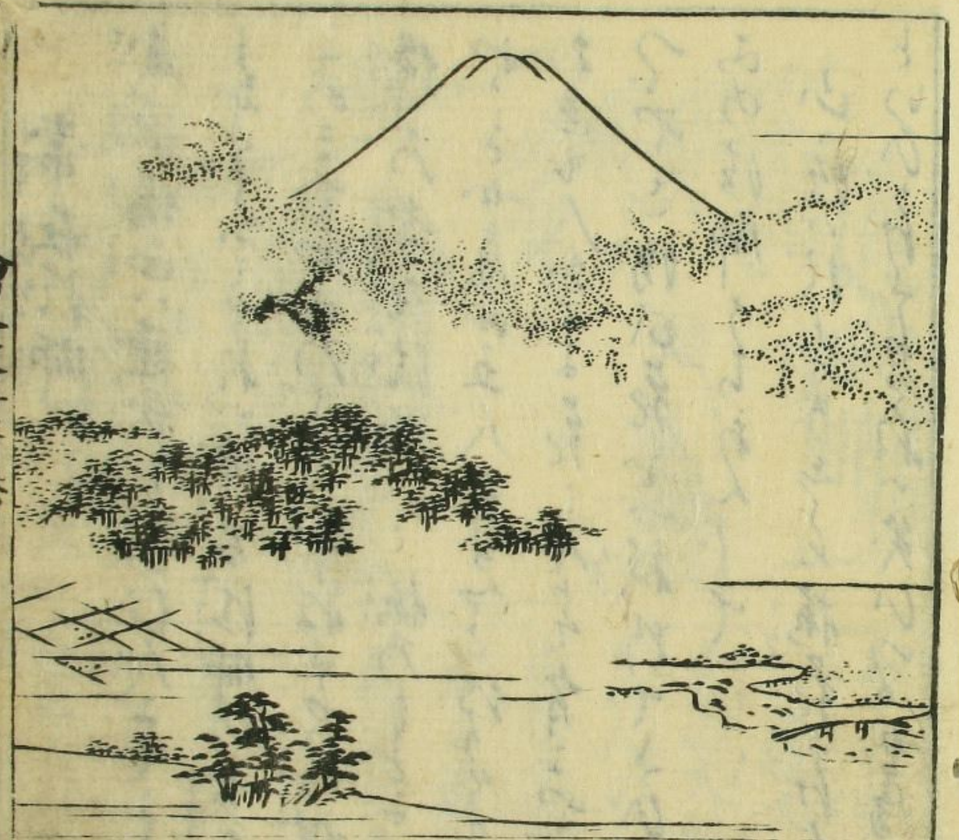
の 寵 な ゐ こ ま 見 ま 佐 渡 ま 守 ま 吾 ま 敬 ま 佐 友 ま 作 友 ま 次 ま

我と人世武勇のきこえあり多抱院の法時小面の士として兵衛の曹司よし保延三年八月俄に書をとゝのへ俗とのごとく痕あらざいとけなき父乃家と出て別をんとするを神ともまもりたまへれを母君乾浄足をあらひて床の下より脇差し衣を掃て出たち裳を羅てうつゝ糸侍とかつて扱よ西行と改まうこと

を決して大抵

剃ることいと苦しき毎に二月十五日を

なくなく取乱とせんと



吾日辛とおもひて東国と発過さし時富士の山のありさま風とかひく雪と

そらの気色のうち消て形もしられぬ

おりひ歌

数撰集こおもひ

の詠歌からぶくさ

いとゞ面おもて

世俗あはれと思ひ出ん人のためにとて

をつゝを故と古の事ともの

おぼえ出ることのなり

常在法師

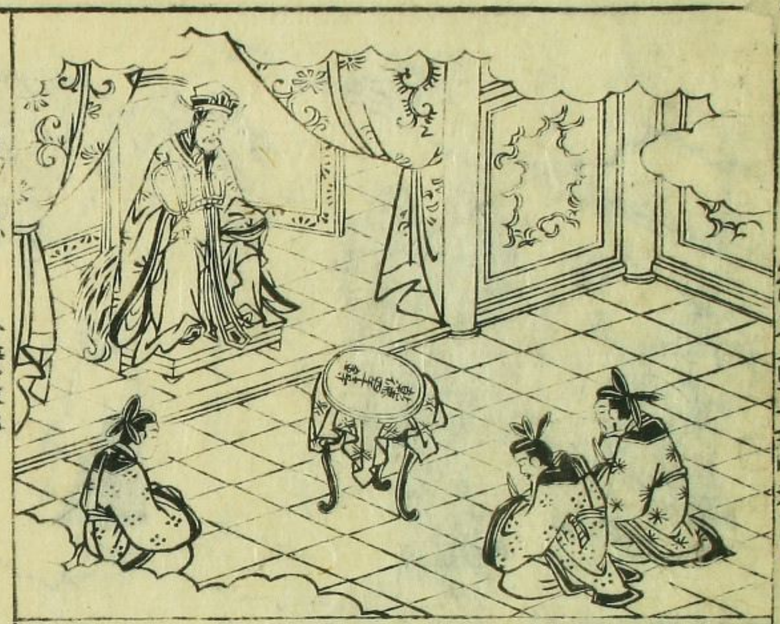
咸源倡正八連句をよのむ人みてこう房卓乃者とも
うふくうかくれい仲習法師の学生といふおやしま
こゝまでかくつゞけ乃ごくつゞけねる法性もの花も盛ま
仲乃常在法師いと様乃ものとなりぬるて結びるゝ
わかき女房四五人花こんとそ有まやかんどおざゝを
お通る人かまよ花こんとそ云てふいわそ
てやき坊ゝ花と一枚折てそびてんやといつてくれい
あの法師うちあんじて
山の法かおりまちる花

といひけるわくれい笑ひつゝ女房ともいふとおく

あさされてうつゝそめあか

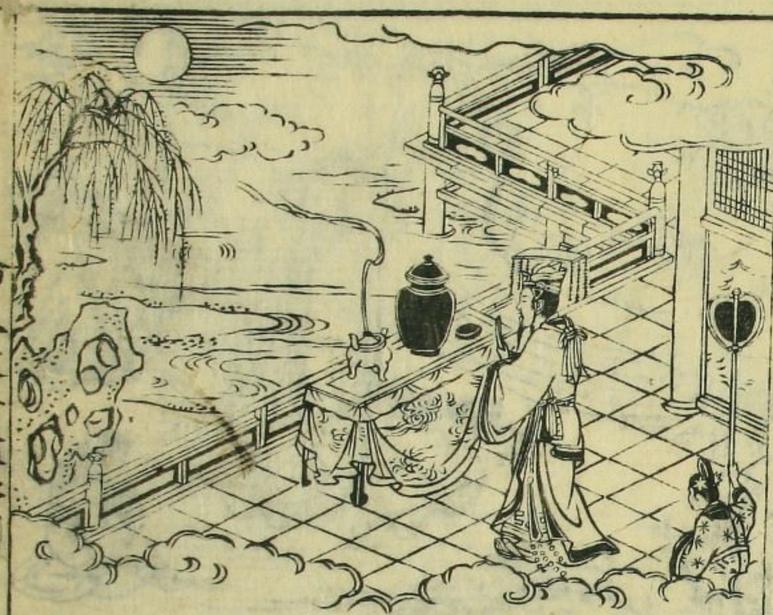
逍大祖　合璧故事

宋の大祖蜀乃ふと平てう人の盗ゝ入うる鏡とおら
れるお鏡の背ゝ乾徳四年ゝ鋳といふ字あるゝ時
乾徳三年乃大祖崩るゝ
いつらんそ年ゝ鋳るゝと
賢んやと時の宰相ゝおれ
らゝ事明めうゝて答ふ
人乃ゝ只ゝよ士陶穀實



宋帝　合璧故事

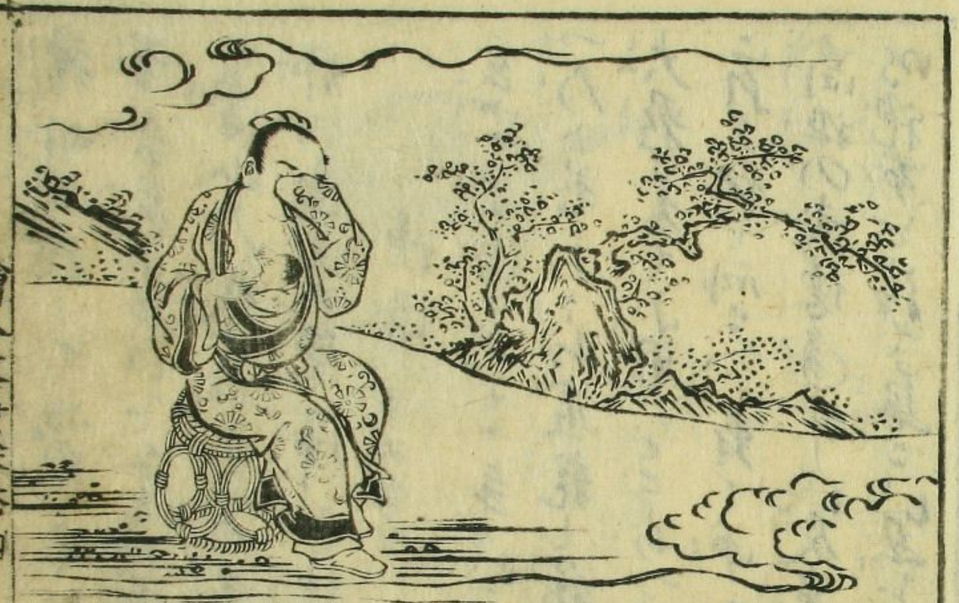
唐の末帝清泰後唐の明宗の第二の子にして宰相の官儀を立てらるゝ二人奏していそく蜀のけしきよからず早早軍おこして蜀の宮人を向ふへ召し集めて皆大水に投入れ喜び宰相と共に書を讀人を用へしとく皆よき大なる儒官を重ぜられしとなわ



うつ取逃の清泰を望わづかの書て疏瑞龍の中へ投て月のおよ香を焚天よ祝告て明日金乃笛を投入れわの姓名を書少さきに首よ盡文紀とる次小舩嶺を降るう末帝つゐかに二人う徳行と奇異なわとせられるよこれを即亟相の友よ称しみよるれ如く帝乃心よ篤へとし

娥皇女英 列女傳

舜二妃帝堯之女娥皇女英也舜耕於歷山漁於雷澤陶於河濱堯聞舜賢而徵之以觀其內治於是堯乃以二女妻舜於嬀汭舜飯糗茹草不敢甘味徒行不敢乘車躬親耕稼以盡人子之道鰥居五十而堯聞之以爲不可以無室乃以堯之二女妻舜於畎畝之中舜既娶堯之二女治家有婦道甚敬而不解舜犯而不校於是瞽叟與象謀欲殺舜舜往於田日呼旻天號泣於是舜之小弟象傲喜而敖游舜往於田二女治絺衣於是瞽叟與象謀浚井旣入舜從而揜井舜潛出去象以爲舜死二女曰謀出自我舜告我曰善事父母二女曰謀往自我舜告我曰諾遂往入井從匿空旁出去二女不知舜之潛出也以爲從井死堙井旣畢從其上舜在焉象與瞽叟大驚舜復如故瞽叟與象又欲殺舜舜又告二女二女曰往哉告我曰諾遂往入室舜鼓琴二女鼓瑟象見之謂其二嫂曰謀殺我者我父母也我無所歸獨有二嫂可以歸事我於是象乃治其父母牛羊倉廩以分舜舜曰此我謀也鬱陶思君君亦思我於是往入舜宮舜在床琴象曰鬱陶思君爾忸怩舜曰惟茲臣庶汝其於予治帝乃分之二女以觀厥內於是舜徵用事歷試諸難入於大麓烈風雷雨弗迷帝堯嘉之遂以爲天子



紀下湘之北乃神之

元德秀 唐書

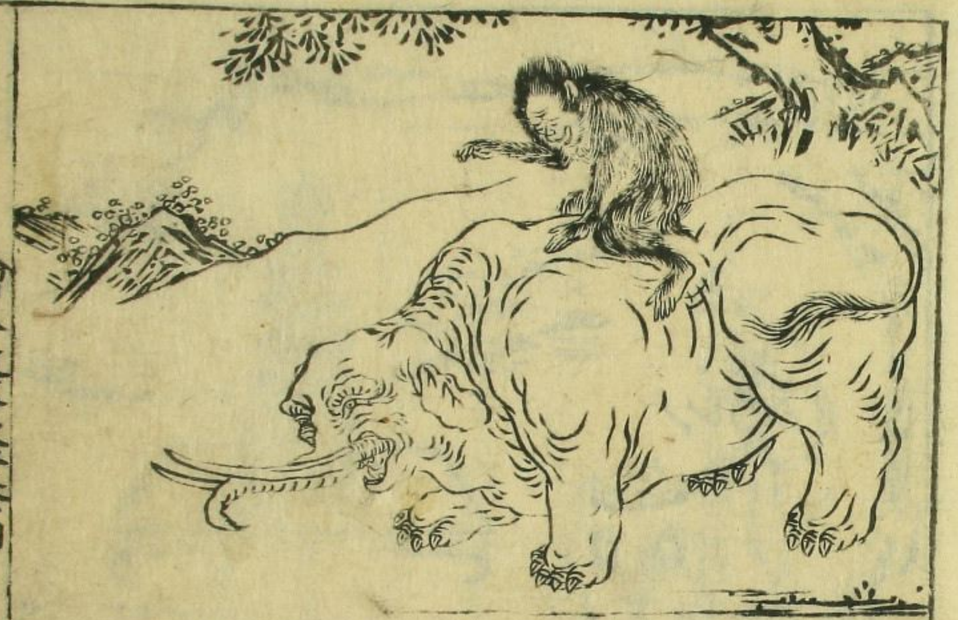
唐元德秀初爲魯山令時兵早死未葬一月之後搜求死女之甚急不得已而爲之元德秀收之父抱之宅抱哀之乳之含之小兒之泣止之既旬日許乃有乳汁出乳之勝之故元德秀之誠心之天

神明ヨ感シテ母ノトクニ男ノ乳ヨリ汁湧出ク人
皆奇実ノ品ヒトヲ通ヨソ授ト成長ヲ施ス
イ魯山乃代官トナリ清心廉直ヨ政化トナシ
邪ノ心ソノ徳澤ヲ欲ヨ祀リテ寝ルトナリ

種植　事物紀原

玄宗皇帝朔ル年ヨ正月ヨ霜ヲヤテ仰ノ大夢ヨ
乃小鬼ニつらレ宝殿ト舞ヨ入ヨソ鬼ヨ
大鬼来テ小鬼ヲとらへ喰ヒ玄宗ニ奏ノ申ニ
其ノ名ト問ノ大鬼ノ申さく呂ハ終南山ノ進士鍾馗ヤ
高祖ノ武徳ノ中ニ及第セシト称ヘ階ヨ触テ死ヌ
ソノ冤ヲ報ン為ヨ誓テ天下ノ賓客

ノ鬼ヲ除ク玄宗ヨ奏シテ病ノ癒ル呂ヲ命シテ
ヲ図ヲなし天下ニ伝ヘシトや　▲或ハいそく俗名　有と又本草ヨハ蘭ノ名ヲ有



程こ跨象　太平廣記

唐の敬宗時雲南の名を浮ら武と云人あり武和
門を叩く者ありて窺ひ見れハ一つの程こ白象
小隷未だ武よしのひいひろハ八象。雖言あり君
呂を数一ぬれ八象把ふとわるいされ八象そして
いこふ毎そて拳を弄わと云武周て驚とや他のもの
と同程こりいもく此山の南二百餘里の岩穴ありその
中に巳蛇あり象彼がために呑てる教とふこひ象ハ
七一のみと云武不便ふ思ひ毒を矢ふ海てまぬ
行てこれをふたうこ教ハ八の巳蛇牙ハ紋のとく
眼ハ鏡ふ似ふの岩窟の下ふ居すかいちらを
張て矢を発一のやうこ云
ふ眼ふ中ふ像ふ穴の中ふ
挙雷のかくして巳蛇をうち
出驚おて跃ふ動てそ穴の
中をこれ八象の骨とあれ
ふ積ふり其内教ふの象
ふも各ふ紀象牙を鼻ふ巻
来て武ふ献一跪て礼を
ふりうとふ博物志ハ
いそく巳蛇象を呑て三年
ふしてそ骨を出すといへり

烏龜豐塔 翰卅錄

翰耕先生枕外と呼ぶる在り明白禽と共に樂ぶ者有り龜大小七枚を儿の上に重て敷き寢て号とつゝみ外者一の大なる龜儿の左右に伏て動ず二の龜有てそ背をおとろ次この龜に乗そ背をのぞう其七のかたる龜

を吸ひてこゝろ尾を伸ばしてよく向ふを俗に小路とるが如し

王純 後漢書

後漢の王純字ハ少林益州の人なり家よふる時途の空舍に旅人と共に宿りて病に向て氣ハ苦ハ子又ハ注者なるか思ハさる病と更に令も須臾のあなをおかす黄金十斤あり此内一斤をとゝし孤なれ行ハを方よるこゝろ純不便に思ひ一斤と次て森と管と殊に金ハ棺の下に埋さおそ後故々よ病ありて縣の令官よ召され大度亭と云ふの長り成るゝ或時いつくともなく馬独来りて純の前乃

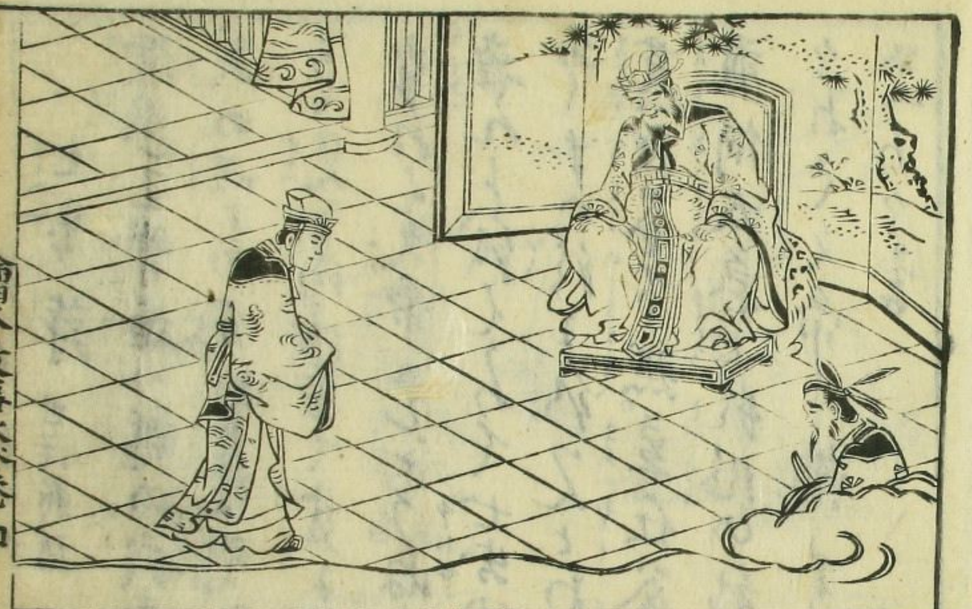
中ゟ止里又大風吹ゟ繡荷ゟ彼一ツ飄りく
王純のおよ𠮟ゟおいつ里もうこの𠮟ゟ地おれを私り
をべのよわ𠮟とて縣の令ゟ𠮟ゟれこをゟ𠮟て知
さのおゟぐ海え𠮟へしゟて𠮟ゟ後の馬よ𠮟おく
雜縣ゟ公ゟれを馬ハ王純を家をかりく頻よをりく
本の馬をれ家ゟ約よくゟわうをゟれをこくる空こを
ぜくれとやがて搦へて魚俵しくゟ王純詳よ𠮟を
の座を次ゟ捕の被を洗ゟ事まて𠮟ゟれこを安矣
乃足ひをかし真繡の被も馬と尾よ𠮟ゟいっを海
おしっを方い隱德を種ゟとゟ地おくめとの𠮟ゟめ
王純ゟ地ハ必ゟしてお幸ゟ方おをさ𠮟人ゟを葬い金を

搦の下に入ゟゟ
事を𠮟ゟれこを大ゟ
驚ゟれゟ赤ゟの
金ゟと𠮟者お被
ゟ文ゟ𠮟ゟ宮へゟり
ゟ洗ゟを𠮟ゟり
しにを方に葬ゟ里
ゟうのや郎っ大足ゟを
報とゟ被ゟ天ゟ里
ゟ洗を輝しゟ被
おくめと感嘆ゟわ

うまよわる王純次米に三身して鄙縁の令の宮よ成ぬ

子路 孔子に弟子

仲由字ハ子路孔子の門子七十二賢の一人なり始ハ家貧して親ハ藜藿を食し釈の粮を負んよ米と百里の外よ負運ひ償をえて給親として孝ありと釈とうしみひて後南方楚



従車百乗をもさづ爵禄爵建を賜て六解四年と一説くらゐ、裕とも至て富し昇と列て食し爵貴よ具へられ収とせしていそく臣藜藿と食米と負て成とも釈の令に存なんのを歎へともわすぬしよて嘆くら孔子曰仲由か釈の生るに事てハ力をつくし孔に事てハ心を盡し去やと褒美しのひそ

七歩の詩　世說新語

陳思王曹植八魏の武帝の子文帝の弟なり幼
ゑの時より才智發明ありそれ父帝の寵愛なり
ける事を聞て文帝竟てこれを殺んと欲ねごとをいひなて
ども猶文帝竟とうとき兄弟の中に約を能くし兄弟
喪んと欲して七歩の中に詩を賦すべしと命ずいはく
かずば法に依て罪せんと植命を受て詩を賦しけり
其在釜中泣本是同根生相
煎何太急と此詩を聞て兄を心ある事を感
ぐれて文帝ハ慚ぢ悔ゆる事あり

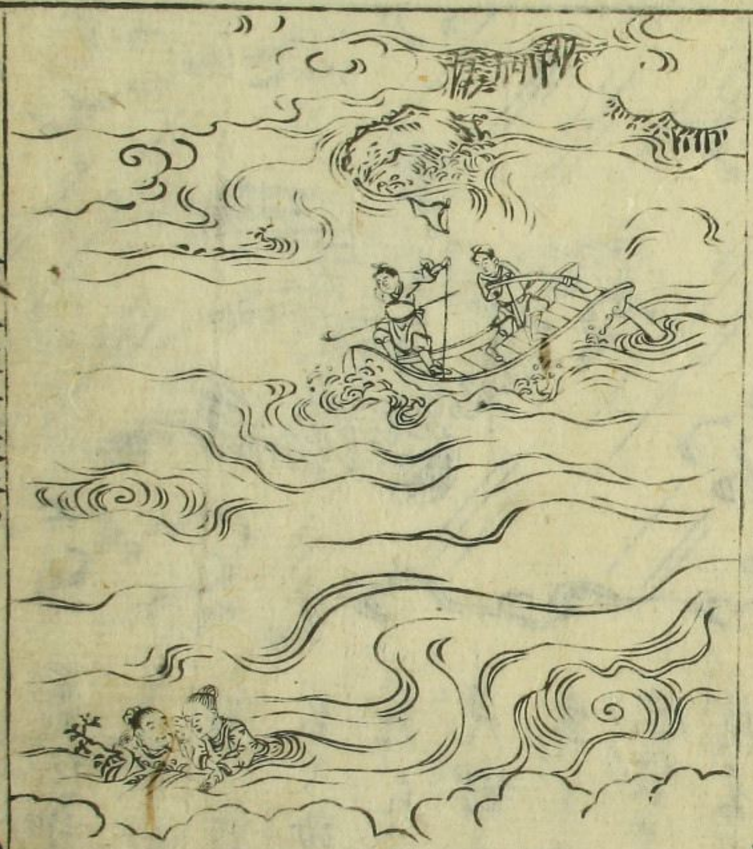
季札　史記

吳の季札いその君王壽夢の末のまふて賢人なり
父の命と兼て使ゐ四へ使ふ
ふ行同徐と云ふ所の君なる
ふて相見へけるが徐君季
札の寶の劍をえて望ゐ
思へどもちかく云出すくて
ありけるを季札も色を
見て與んと思ひしも時ふ
使者よ急く事あれば帰

漆ん之ひ彩ぐるうそ喰ひ徐の「元孔をわ季れ孫
ゐる級と解て徐君の墓ぱ樹の枝ぬ掛てそもれゐ後
君怪てそ故を問それいそて家そへめ心ぬ辞
して此人ぱ魯んと呂ふ今を人孔ゐわして吾ゐ約束
をゐ守うんようむくべきにわけとうあ、へる

陳榮　皇明通記

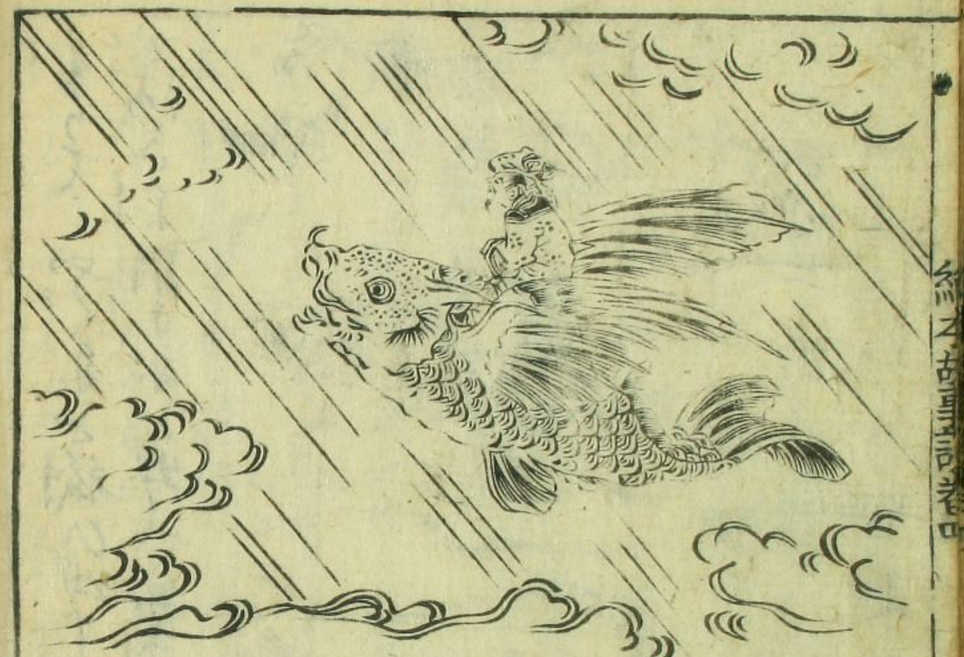
建州の陳栄字ハ希仁家貧一て育ゐ母と孫
孝好とつくして天ぱ彩ゐ遍ぱ雨眼を開をわ
永樂年中ぱ建の地洪水ありて魚舎皆漂ひ
流ぎわ陳栄母のまををして一本の木ぱれ彩て流
好とぱまそあそ和郎のち獲の夢ぱ神人



来りてくやぐ糸と嬴ひ彩彼と称ふへしとゐうそてか
ゑぎぱ納ぱ糸を彩て母ぱもに善くたまわら

子英　列仙傳

錦つと呂ふ所乃子英とゐふ者に
く称ぱ入て魚を
捕ゐわ時未ぱ経
とゐうそ魚の好
を変して竟と化
ふ去ふこと一年ふ
して長一丈ぱ彼と



なわの角と云ふ異人ことばたゞ
子英おやしまして尊と母
謝し鯉言ていそゝと迎
来て海を迎へ候ふ天子
昇らんと帝大に雨ある子
英鯉を乗て飛されを
年〳〵過来て妻子と
飲食すること数日ありて辞
復来て迎へさゝめばすること七十年之後異人尊
が判を建てまた

早稲田大学図書館
011688990817